

真宗高田派

檀信徒研修会だより

ぜひとも檀信徒研修会にご参加ください！

岡崎市浄泉寺住職 戸田恵信

高田本山では令和五年五月、「開山親鸞聖人御誕生八五〇年」などの大法会（奉讃法会）が厳修されます。スローガンは

弥陀のよび声 「なもあみだぶつ」を聞いてゆこうです。

檀信徒研修会に、続けてご参加くださってみえる方も、初めての方も、今後共に学ばせていただくことが、来たる大法会を豊かな尊いご法縁として頂戴することになるのではないかと思います。

本年はコロナ対策もあり、大勢の方々が集まっていたいただき研修会を開催することが難しくなりました。

第七〇回檀信徒研修会が賑やかに開催できることを願ってやみません。その日を楽しみにお念仏の日々をお送りください。真宗高田派宗務院・檀信徒研修会係

研修会では様々な例え話を折りませながら、なるべく柔らかく、また楽しく、ご法義について、また檀信徒の意味、檀信徒の皆さまにこれだけは知っておいていただきたいこと、寺の意味などをお伝えする時間になったらと思っております。

「待」という字は、行人偏に「寺」。寺に行ったり来たりすることが「待つ」という字になったそうです。

次回、第七十回檀信徒研修会にたくさんの方々のご聴聞されることをごころよりお待ち申し上げます。

次回の研修会では「真宗」についての講義をいたします。講義（法話）の概略は後述のとおりです。

まず、哲学者・和辻哲郎先生の短編随筆『土下座』を読み、ご法事の意味を考えます。

若いころ祖父の葬儀に田舎に帰り、野で行われた葬儀の最後、父と共に出口で土下座をし会葬者にあいさつをしました。意にそぐわぬ中で、目の前を通り過ぎながら挨拶をする会葬者の脚に頭を下げている。

その内に、その形を通して人々の祖父に対する思いやはたらきが見えてきます。そのはたらきの中で自分のいのち

も、生かされて生きていることに気づかれて行きます。そして「形」がいかにも現代社会において大切なものかということにも気づかれて行かれます。

現代社会ではご法事などの大切にされていた「形」が少しおろそかにされているように感じられます。皆さまはどう思われるでしょうか。

最近熱心な檀信徒の方々ですら「形」の意味がよく分からずにみえるのではと感じられます。

具体的な話を申しますと、例えば葬儀における「紙華（四華）」の意味は分かりますか。

「真宗は生花であることに意味がある。枯れることにより生老病死の人生をお教えくださる佛様の慈悲の働きを表すのが佛華である。造花は枯れないから適当ではない。」と聞かされていたのに、なぜ大切な葬儀に造花である紙の供華なのか。疑問に思ったことありませんか。疑問に思わないことも問題ではありませんが…。

この「形」の意味は、釈尊が沙羅双樹の下で入滅された際、その葉の半分が枯れ散り、半分が白く変色したと伝えられ、その姿をかたどったものといわれています。造花である紙華（四華）は、その「形」で無常ということを教えにくたさっているのです。意味を正しくいただいた上で、

「形」を護ることは重要だと考えます。

また他の例では、最近数は少なくなりましたが、高田派の寺院の一部では葬儀に鑊鉞（シンバルの様な和楽器）を打ち鳴らします。

時折、檀信徒の方から「真宗なのになぜあの賑やかな楽器を葬儀で使われるのか」と問われます。現在では確かに真宗大谷派など、この楽器がほぼ廃止されている宗派もありますが、高田派など歴史ある教団ではとくに大切な法事ではこの和楽器を使います。

この鑊鉞は、釈尊入滅に天地も驚き悲しみ、天は悲しみのあまり雷鳴を轟かせたと伝えられていることにより、釈尊ですら、縁（条件）がそろったなら、入滅をむかえる（起）のだ。「お前も死ぬぞ。本当にわかってますか。」と佛教の根本である縁起ということ、そして無常ということを、鑊鉞の鳴り響く音を聞くことにより私たちは聞かさせていただくのです。尊い意味があるのです。

私たちは「あーなるはずだ」「こーなるはずだ」と自分の思いに執着します。しかしその思いを超えたところに私の人生があります。だから無常（常では無い）なのです。どうにもならない歩みです。だから苦悩が生まれます。一

切皆苦です。その苦悩から解放される道が、釈尊の説かれた佛教です。そしてその佛教の中でこの私が救われる道が、親鸞聖人のあきらかにされた真宗です。

高田本山では、お七夜報恩講ほうおんこうの一月十五日の後夜を、非常に尊い意味がある御法座としてお勤めになられます。高田派の伝統のある誇るべき勤式と言えます。その一つが本山職員が黒衣・墨袈裟すみげさの装束にて、親鸞聖人の著された『入出二門偈にゅうしゅつにもんげ』を唱和されることです。その偈頌げじゆの中で聖人は、「念佛成佛する、これ真宗なり。(念佛成佛是真宗)」と仰ってみえます。そして続いて「すなわちこれ田教のなかの田教なり、すなはちこれ頓教のなかの頓教なり。」とも仰ってみえます。「田教」とは佛教の中で最も完全な教えのことであり、「頓教」とは最も速やかにさとりに至る教えることでもあります。つまりこの後夜の勤式は、念佛成佛こそが「まことのみむね(真宗)」であり、「私にとっての本当の依り処」であると、御正當の前夜に私たちはしみじみと聞かさせていただくお勤めなのです。

「念佛」とは佛を念ずる。この佛は阿弥陀佛です。念ずるとは信ずるといふことです。しかしこの信ずることが難しい。「信ずる」とは人の言葉を受け入れるという意です。また「信ずる」とは「たのむ」といふことです。「頼む」

ではなく「憑む」です。「憑」はおまかせするという意味です。「念ずる」とは「まかせる」。「念佛」とは佛さまにおまかせする。その姿が「なもあみだぶつ」と称える私の姿です。そしてその私の姿(形)すらが阿弥陀佛のはたらきに依ることです。賜りたる念佛。他力の念佛です。

「成佛」とは佛になること。この佛は「覚者」のことです。生老病死を苦悩とし、迷いの道を歩むのが私たち凡夫です。その苦悩から解放され迷いの道から覚める者を「覚者」と呼びます。その覚者に成ることを「成佛」といいます。

念佛申して浄土に生まれ凡夫である私が佛と成る身と成らせていただく。これが「真宗」です。

「真宗」とはこの私にとっての本当の依り処のことです。そして阿弥陀仏の喚(よ)び声「なもあみだぶつ」を聞いてゆく歩みこそが「真宗」です。

そのみ教えに遇うて行く人を檀信徒と言います。

その念佛のみ教えをご聴聞させていただくための念佛道場を寺といいます。

そしてそのみ教えに出遇うための道場を護りお支えしてくださるのが大切な檀信徒様の役割なのです。

高田のあゆみ 三重県多気町 明通寺住職 佐波真教

檀信徒研修会では、「高田のあゆみ」と題して、親鸞聖人から現在までの高田の足跡を辿っています。前回のお話は、高田で中興上人の呼び親しんでいる真慧上人のところにさしかかってきました。

高田本山では、令和五年に真慧上人の五百五十回遠忌の法要を営みます。

真慧上人の時代は、ちょうど今NHKの大河ドラマ『麒麟がくる』を放映しています。その激動の時代です。高田本山には、織田信長や朝倉義景、豊臣秀吉、徳川家康などの書状が遺されています。大河ドラマを見ながら、この時代にお念仏のみ教えを伝えていく苦難に思いを馳せてみてはいかがでしょう。

さて、今私たちを取り巻く状況は、新型コロナウイルスの影響で、これまでほとんど経験したことのない事態になっています。

しかし歴史を辿っていけば、飢饉や災害、疫病の流行などがありました。今日のように、さまざまな事が発達していない時代に人はどのように乗り越えていったのでしょうか。

高田の歩みは、そのような時代とそこに生きる人びとと共にありました。

親鸞聖人の時代も、飢饉や災害など苦難の時代でした。親鸞

聖人八十八歳のお手紙には、去年から今年にかけて若いも若きも男も女も多くの人が亡くなっていったこと痛み、わが事として受けとめながら、その中でも仏法を聞いていくことの大切さを説かれています。

このお手紙は、前の年から起こった飢饉がもとで多くの方が亡くなっている状況の中で、念佛の教えを伝え続けているお弟子さんに書かれたものです。悲しみにくれる関東の人びとの身を案じながら、その悲しみの中で大切なことを見失ってはならないとの思いから、書かれたものでした。

飢饉によって大切な人を失った悲しみや不安の中で押しつぶされそうになっている人びとにとって、それまで大事にしていたことが、むなしく感じることも多かったのではないかと思えます。

親鸞聖人はおっしゃいます。生死無常ということは、くわしくお釈迦様や阿弥陀如来がお説きになったことです。私は命の終わり方に善し悪しを言いません。それはお念佛申し、信心を得る人は、必ずお浄土に生まれるからです、と。

お念佛のみ教えは、いつでも、どこでも、誰にでも、道を開く教えです。どうかこの厳しい状況ではありますが、歩みを共にして参りましょう。

檀信徒研修会が開催されるまで、しばらくおまちください。